

自然を語る会 報告

2月17日(土) 10~12時 於、東京ボランティア市民活動センター

参加者 12名

担当：鈴木善次さん、岩淵徹郎さん

侵略的外来種問題について

ポール・ブルックス著『レーチェル・カーソン』第16~18章は、真実追求の偉大な古典でもある『沈黙の春』の執筆背景、十分な専門知識収集過程、反響等が記されている。

『沈黙の春』の主要テーマ、有機塩素系殺虫剤（DDT、ディルドリン、ヘプタクロル等）の広範囲、大量の空中散布に対するカーソンの厳しい戦いの末、人間を含む生きものたち（生物多様性）が守られた。薬剤散布のターゲットは日本在来種（マメコガネ）、南米原産の（ヒアリ）等であった。南米原産のヒアリはアメリカから海を渡って外国に侵入、一部の地域で定着したが、約70年後の今日、中国、台湾等を経由して貨物コンテナに乗って来日し、大騒動になった。

担当の鈴木さんは、昨今話題の侵略的外来生物、特にヒアリ問題に関しても、新聞、テレビ等の不十分な取り上げ方を憂慮され、我々のディスカッションのため各種の参考学術文献を紹介された。

関連文献コピーに基づき、鈴木さんを中心にして、皆で語り合ったのは有益であった。

『沈黙の春』にもヒアリの記述があるが、カーソンは（地上/水棲の）鳥も昆虫も魚も土壌のミミズも微生物も、生きもの皆殺しのやり方に異を唱えたのであり、生きものの命、繋がり、組み合わせ（生物多様性、それらを生み出す種々の生態系）に力点を置いていたと思われる。

また今回、外来種を取り上げるにあたって、岩淵が外来種の定義、問題点、規制等について整理し解説した。今日、さまざまな地域で開発重視の人間の活動の結果、自然環境が変質し、そこに棲んでいた在来種が天敵を含む多種多様な生物と共に失われ、その空間を埋める形で外来種の天国となっている。しかし、外来種は本当に悪者だろうか？

最後に鈴木さんが紹介されたのは、シュヴァイツァーの（生きものに対する）倫理思想と、フレッド・ピアス著『外来生物は本当に悪者か？～新しい野生 THE NEW WILD』（草思社）であった。長い時間軸では在来種も外来種もない。外来種こそ生物多様性に貢献するという見方もある。人間は生きものの一つにすぎないので、人間がいなくなっても種の多様性は続きそうだ。大きな課題を得てしまった。（文責：岩淵徹郎）